



会報 第7号

発行所
栃木県立
真岡農業高等学校
同窓会
発行人
同 上
印刷所
森田印刷所

随 想

同窓会長 田上 昇



先ごろ十日の日程で十年振りにロンドン、パリ、ローマをみる。

一目で、ことに気付くことは十年前と変化が少なくない。

住宅でも食事も、服装でも乗用車でもそれ程変わらな

い。ただ物価は高い。失業者も多い。さらに細かく比べると、真岡のレストランのステ

ーキやサンドイッチの方が旨い。宇都宮の街の方が綺麗

な服装をしている。車はメツキリ違いあちらは古いし傷

は平気。大きさも違う。ドゴールはこちを「ワサギ小屋」と

いつたが今ごろどこかで生欠伸を噛み潰している。

戦後昭和三十五年ころから今日まで約二十年の発展速度は、まさに史上類のない驚異

的なものだろう。

いつの間にか追いつき追い越した。

だが、世界の先進国はだまって見ている。失地回復をはかる。毎日の新聞はそれを報じている。当然こちらの



新設の園芸実習室

生活の伸びにも、産業の進歩にも影響は必至だ。従って、これから先の二十年の速度はダウンする。そこに政治のむずかしさがあり、経済の困難さがあるだろう。われわれは、その困難さに堪えなくてはならない。むずかしさを切り抜けるには、肉を切らせて骨を切る」というが、なんとなくそれに近いしそれに似てゐるような気がする。

問題の牛肉やオレンジの輸入にも、逃げの一手ではすまされまい。

話し合ひで道を拓いて、自由貿易を守ることを考えさせ今日このころではあるまいか。

卒業記念樹に思う

学校長 岡本 博



「環境は人をつくり人は環境をつくる」と言われますが、本校はことに先輩の築いたすばらしい環境を大切に思い誇りにしています。

毎年、創立記念と卒業記念に当たっては今日あるを感謝し植樹を行ってきました。

心のこもった卒業記念の樹を、在校生にも卒業生にも、いっそう意義あるものにした

いと名前をつけることにしました。

昭和五十五年卒業生には紅白三本の「あめりかはなみづき」を贈ってもらいました。

日本からアメリカに桜の木を送った返礼に贈られてきたことに因んで「友情の樹」と名づけました。

「学校はよき友をつくることである。美しい友情を育てよう、卒業後も友だちを大切にしたい」と願ってつけました。

昭和五十六年度卒業生は、樹齢六十一年の「野梅」(やばい)を贈ってくれました。「こち

吹かばにほいおこせよ梅の花あるじなして春を忘るな」の歌、学問の神、菅原道真公に因んで「学問の樹」と名づけました。

「学校は勉強するところである。向学心にもえて勉学に励もう。卒業後もたえず自己研鑽に努めてほしい」と願ってつけました。

昭和五十七年度卒業生からは「泰山木」(たいさんぼく)が贈られました。常緑の高木で葉も花も大きく、樹形が端正雄大で堂々としている。泰山(中国山東省にある名山)または大山と書くように青少年の理想を象徴するように思われ、「少年よ 大志を抱け」の言葉に因んで「大志の樹」としました。

「理想にもえて学校生活を送ろう。卒業後もいっそう希望をもって頑張つてほしい」と願って名づけました。

三月は「野梅」の香り高い学問の花が、四月は「あめりかはなみづき」の紅白の友情の花が、五月には「泰山木」の鏡なす葉に大志の花が咲いてくれます。その折りに触れて卒業生の皆さんの御活躍をお祈りし、在校生諸君を激励したいと思ひます。



昭和57年度卒業記念「大志の樹」

スイスの国情とその魅力

教頭 渡辺 寿一



映えて美しさを増しております。スイスには海抜四千米以上の山がなんと三十九もあるそうです。また湖が四十五もあり、日本の九州よりやや小さい国でありながら、この山と水とを最大限に利用していることも知ることができました。

昨秋、文部省教員海外派遣団員として西ドイツ、フランス、スイス三カ国を訪問し、研修の機会を与えていただきました。

九月二十日より十六日間の短期間でありますが、その間天候に恵まれ、自然の美しさと偉大な文化遺産に魅せられ、また同じ人間として異国民の人情の機微に触れ、貴重な体験をすることができました。

なかでもスイスは私にとって魅力の国の一つであり三日間の滞在ではありましたがこの眼で確かめ、多くのことを学びとることができました。

〇山と緑と湖の町 私の滞在したチューリッヒの町はスイスの西部に位置し人口約四十五万人、周辺部を含めると七十万人を数え、スイス全人口の二割を越える地域で昔から交通の要衝として商業、貿易、金融が栄えスイスを代表する都市と聞いております。

丘に囲まれリマト川をはさみ、チューリッヒ湖を望む市街は、山と水と緑が交なす美しい中世の街とも表現したらよいのでしょうか。

多くの銀行やレストランの並ぶメインストリートにはスイスの国旗が道路をまたいで掲げられ、街路樹の緑が一層

映えて美しさを増しております。スイスには海抜四千米以上の山がなんと三十九もあるそうです。また湖が四十五もあり、日本の九州よりやや小さい国でありながら、この山と水とを最大限に利用していることも知ることができました。

〇牧畜業と食糧の確保に学ぶ 山国であるスイスが、その国土の六割を利用してのことです。市街地を歩くと外に出ると美しい緑に変わります。牧草畑がどこまでも続きます。ある町では公園の中まで牧草で管理されており、また山岳地帯では海抜二千米位まで牧草の栽培が行なわれております。

このようにスイスでは農用地の三分の一が牧草畑です。一般的には、夏になると牛をつれて山の上へ上へ移動し、暑い時期には山頂で牛に牧草を食せさせ、山小屋でチーズを作り、秋になると下へ下へと降りはじめ冬にはまた裾野の村にもどる山岳酪農の形態が多いようですが三十三頭の規模で他産業に均衡する所得が得られるよう国が保護政策を取っているとも聞いております。

スイスのパンはおいしくなると確かに差があるようです。スイスは山国のため、小麦もその多くは輸入に頼っており国は、法律によって非常時に備えて輸入食糧の一〇％を蓄えているそうです。現在その備蓄量は百万トンを超え、スイス人が向こう二年間は食べ

られる量を確保しているとのこと。スイスでは、おおいさを追求するフランスと、備えを優先するスイス。わが国も石油だけでなく、農産物の備蓄についても考えなければならぬ時ではないでしょうか。

〇市民の生活と教育の厳しさ スイス人は大変な勤勉家で朝の七時半から勤務の始まる会社が多いそうです。労働者が不足しているため休年は六十五歳のこと。平均給与は月収三千フラン、日本円で三十五万位。勤労者の六十

七十％はアパートで生活しており、給料の三分の一が家賃、三分の一が食費代、残り三分の一がレジャーに当てられるそうです。有給休暇の三週間をまとめ取りして地中海のパカンスを計画する人も少なくないそうです。

学校の教育費は、国が全部負担しているとのこと。小学校の一年級当たり児童数は二十人以下、特に低学年においては厳しく教育しているそうです。家庭へ宿題を持ち帰らせないことも良いことかも知れません。補習のための塾もありません。そして二年生から三年生に進級する際、理解不十分な児童に対しては、教師が親に二年生の勉強をもう一度行なうことを申し渡し、親もそのことに従って子供を留年させるそうです。

高等学校への進学率は二十％と大変少なく、大学進学率は更に少なく一〜二％で、エリートのための教育が徹底しているようです。

魅力の国スイスの一面を知り得た喜びを感じるとともに、今後の国際理解、教育に役立てて参りたいと存じます。

◆ ◆ ◆

挨拶をかねて近況報告

顧問(前校長)

高根澤 富男



大要ご無沙汰しております。

同窓会の皆さま方には益々ご健康でそれぞれの道にご活躍のことと心からお慶び申し上げます。この機会に紙上をお借りしてご無沙汰をおわびいたすとともに近況をお知らせしてその責をいたします。

私は皆様方の母校で六年間ご厚情とご支援を戴きながら思う存分仕事が出来、心残りなく退職、郷里の茂木町に帰り、早や三年の年を過ごしました。

茂木町の教育長として郷里の教育発展のため微力を尽くしています。過疎化の波が押し寄せ、児童・生徒の減少と小規模校、複式教育を余儀なくされ、農山村教育振興に極めて困難な問題が山積されていくなかで、教育行政を担当苦慮することも多い毎日ですが、幸い健康にも恵まれ、郷里のことと地縁関係も多く仕事にもやり甲斐がありますので、与えられた職責に積極的に取り組んでいます。

かつて皆さんの母校に在職中会員のご協力と皆さんの母校を思う心に支えられ創立七十周年の記念事業として同窓

会基金の設立、校門、庭園の造成、又「今日あるを感謝し最善を尽くす」の生活指針の選定等々ありましたが、これらを感じる生活の寄りどころとして生きていくことが私のこの三々年間の生き様と申せましょう。いつも有難く感謝しています。

私の去った後真農高は、益々整備され教育実践の素晴らしさに刮目いたします。環境緑化最優秀、農業クラブ全国発表会で生活科生徒が経営部門で全国最優秀賞に選ばれたことは、全国農業教育史上でも最初の壮挙であります。

真農高校の教育が岡本校長先生をはじめ全職員、同窓生諸氏の絶大なご支援、生徒諸君の真しな学習生活の総和であると信じます。これはかつての永井文部大臣の名言「富士山よりも広い裾野にそびえ立つ八ッ岳」通り真農高の農業教育、全人教育を物語るものです。同窓生の誇りであり、後輩達の自信と意欲の昂揚になっていることと喜びにたえません。

八十年の歴史と伝統、一万一千余名の同窓生の重みを今更ながら身にしみて感じます。同窓会、並びに会員各位の益々のご活躍とご発展をお祈り申し上げます。

ニュージーランドを旅して

昭和十一年度卒 勝田 正



昨年十二月、日光東照宮主催によるニュージーランド国答礼訪問の一員として、同国を旅する機会を得た。

ドウリン首相を迎えての晩餐会、マヌカウ市庁の表敬訪問を除いては、約千キロメートルにおよぶバスの旅であった。車窓から見る豊かな緑、大草原に遊ぶ羊の群、美しい海岸線など、「美しい国・ニュージーランド」を印象づけるに十分なものであった。

同国は、海洋民族である「マオリ族」が住んでいたが、十七世紀のはじめ英国人に発見され、英国の植民地として栄えたが、第二次世界大戦後独立国となった。従って、形骸化した「総督」が、制度的に存在し、国会などにもイギリスの制度が色濃く残っている。

国土は、北海道を除いた日本面積のほぼ同じ位で、人口は僅かに三百十八万余である。

このうち、十位が専業農家として、平均百五十ヘクタールの農地を保有し、主として酪農業を営んでいる。

同国内で約六千万頭の羊が飼われており、そのほか、牛馬、鹿が飼育され、酪農品の輸出は、世界第一位、羊毛は第二位、食肉、木材においても指折りで、いわゆる農業の先進国である。

日本のバター、チーズ消費量の九十%までが、同国産であるといわれている。

農業防疫には大変な配慮を払っており、植物・種子、果物の輸入制限、入国航空機の機内消毒、旅行者の靴に付着した泥土の消毒にまで徹底して行なわれている。

都市部は勿論、地方に至るまで蚊、ハエはいない。

同国は、毒蛇など動物の天敵となるものが生息していないことでも有名である。

同国は、世界的な酪農国であるにもかかわらず、国内工業が未発達であるところから失業者を吸収する企業が少ないので、年間十五・十六%に達する物価高騰と失業者の増加が問題になっているようである。

今と昔の学生気質

昭和十一年度卒

石川 巳春



卒業してもう四十七年になんなんとしている。早いもので今では皆、白髪の頭でお互に孫を抱えている年頃になった。

あの頃を思うと、青春時代がまるで嘘のような気がしてならない。今の学生を若に見るにつけ、俺もあんな若い時代があったのかなあと、疑心暗鬼の中でつくづく思いをめぐらすのである。

それにしてもバリッとした姿で燃えていたあの時代は人生の一体何だったのだろうかと思う。

友の情けに感動して泣き、難関に遭えば火の玉となつてぶち当たり、どんな苦労があっても疲れを知らず、それでいて何時も爽快であり、まさに青天のへきれきの毎日であった。

長い人生から見れば、一瞬の出来事のようにささ思われるが、それだけにたまになく懐しい。青春よ！もう一度我に帰れ！と絶叫したくなるのである。

私は四十有余年、小中学校の教員生活を過ごしてきたので、どうしても昔の我々の学生時代と今の学生とを対比して考えたくなってしまう。

少なくともあの頃の学生は普通校であれ、実業校であれ一町村で二三人の入学でしかないからそれだけに各自がプライドをもって、胸を張ってとまではいわないがそんな気持ちで歩いたものだ。

た。その陰では責任も感じ、人に笑われまいと思つた。同時に人に負けないで一人前にならなければ申し訳がないと、思つたりもした。

私の家は商売をしていたので、よく村の人が集まり、そんな時母は得々として自分の伴が農学校に行っていることを自慢して話していたことを覚えていて。だから、親の期待に応えようと子供心にも思ふのは当然であった。

ひるがえって今の学生を見ると、何故かそれ程の喜びや感激も見えないし、ただ漫然と学校に通い、誇りも夢も持たず色褪せた毎日を送っているように映るのである。勿論、全部とはいわないが、そんな様子の学生が多いのは事実である。そこにはがむしゃらな気力もないし、苦しみや努力も味わわず、ひたすら快楽だけを追って学生生活を過ごしているかに見受けられる。

だから一旦挫折すると、なかなか立ち上がれず、失敗するとそのまま崩れていつて非行に走ってしまうのが多い。

私たちは小さい時から自主性や自己確立が育てられていたから頼るものは自分一人と決めていたので、どんな時でも自分なりに始末をしていた。そこには大きな違いがあったように考える。

敗戦後の日本の復興振りはまさに世界の驚嘆に値するものだが、その復興の主役は正時代に生を受けた我々であることは万人の認めることである。この偉業は少年期の忍耐力、勤勉さ、不退転の気力が役立っていることは事

物を造る

昭和三十四年度卒

榎田 勝彦



今回、会報真農に何か書いてくれとの井野先輩の言葉には困った。

元来物を書くという作業はラブレターさえ経験がない。無い頭を(先もないが)しばらくも仕方がないので、私の職業を主に「造る喜び」とでもいおうか、私の考えを述べてみたいと思う。

私は三十四年度卒で、家は代々益子焼きの窯元です。

窯元の私がなぜ農業高校に行つたかは昔の窯元は半陶半農なので、その頃は陶より農の方が主でしたから、農作業は中学、いや小学生の頃よりおじいさんの手伝いをしながらやっていた。

いま思い出すと、綿も作り

ました。祖母と朝早くポンとはじけた綿を一ヶ一ヶ手でつんで、小さなローラーで種を取り出し、ふわふわした綿になる時は、子供心にも楽しい思い出です。

それに養蚕、小さな目に見えない位の「おかいこ」を祖母が持つて来て、桑の葉を包丁で切りふりかけておくと、その葉にゴミみたにかいこがたかり、それが一ヶ月位で「まゆ」になったと思ひます。

その「まゆ」を出荷したと思ひますが、家で生糸にした反物を作り着物を自給したものです。今考えると高級品でしなね。

私の家は五反百姓なので色々な物を造り自給しました。米、さつまいも、大豆、麦などを作りましたが、収穫時は楽しかったけど、種まき、施肥、草取り等の作業は楽しいとは言えませんでした。しかしその苦しさも、収穫という作業がみんな忘れさせてくれました。

今は陶の方が主ですが、物を作るということと一緒に

私たちは、もうここまで来てはそう長くはないので、せめて昔気質の学生気分を幾分でも彼等知ってもらい、遺産として残こし植えてやりたいものだ。それがこれから残された大きな我々の課題であると思う。

母校を思う

昭和三十六年度卒

山本 功



母校を思い起こすたびに、正直言いまして、寂しいことが多いかと思ひます。まず第一に、校舎の移転です。種

々な理由があり理解できないことはありますが何か寂しいです。次に、現在の生徒像です。進学率九十五%を超えている、すべての高校で生徒指導・生活指導に苦心されておることは良くわかりますが何か寂しい情報が多いような気がします。我々の頃は、長男がほとんどで、長男でなくとも農業に関心をもち、土に生き、農村のリーダーになる意欲を持った友達が多かったです。現在の教育内容をつか

んでおりませんが、自分達の頃を思い起こして要望としましては、生産第一的な面が強かったかと思ひます。今後は、自分、自分達のグループで試みを含めた実験・試験的な面を多くしてほしいのです。そして、ここから興味関心が芽ばえ、次に自覚、責任、意欲が芽ばえ、更に自分による栽培、飼育、そして自分による農業経営へと発展し農業と農村青年の健全宣言ができることを考えます。

産として残こし植えてやりたいものだ。それがこれから残された大きな我々の課題であると思う。

思います。農業は、天然自然というものに影響され、焼物は炎というものに大部分が左右されます。この事は、自分の手を一旦離れることになりません。この自然の力をいかにコントロールするか、これも技術だと思ひます。物を造るという事は、技術と創意工夫があつて初めて良い物が出て来ると思ひます。趣味・道楽で物を造るのであれば苦しみはないと思ひます。苦しさがあればより以上の楽しみがあります。又、良い焼物を造るには遊びがなければ駄目です。常に焼き物を作るだけではすぐに行きづまります。絵、スケッチ、デッサン、書、生花茶道、料理等なんでもやって見てそれらを趣味・道楽にして身体に余裕と知識を積み込んで物を作るためのエネルギーにしてゆかねばなりません。焼き物も農業も定年があるわけではありません。じつじつやりましょう。楽しみながら良い作物、良い焼き物を作るために。

農業雑感

昭和47年度卒
青年部長 広田 茂十郎

今の日本の農業の現状は、目に余る。農家戸数約四六〇万戸のうち専業農家は、約一割の五十万戸にも満たない。穀類の自給率は全体の三分の一にすぎず、農家生活は、農外収入に七〇パーセント以上も依存して成り立っている。果たして生活の七〇パーセント以上を農外収入に依存する農民が、村の九〇パーセント以上を占める村を、農村と言えらるだろうか。そんな農民が組合員の九〇パーセント以上を占める農業協同組合を農民の組織と言えるのだろうか。

今や、農業の後継者は全国で一万三、四千人にすぎず、市町村当たり四名ぐらいという淋しさなのである。しかし、こんな農業、こんな農村の現状であって、国家予算の約一割にも達する三兆円余にも上るのである。それに県や市町村の農林予算、大学や農業高校の教育など、農業に関する予算を合算すると、これは大変な数字になるはずである。何故、こんなにも予算をかけながらも、農村にある数々の問題は解決されないのだろうか。この予算というものが、本当に農民の為に使われているのだろうか。たった五〇万戸の専業農家しかない日本の農業に、こんなに金をかけながらも、ますます専業農家の数は減り続け、後継者が少なくなっているのは何故なのだろうか。農政の不在を強く感じざるを得ないのである。

しかし、私達は、これから農業を続ける以上、農政に對して不満ばかり言っている訳にはいかない。これらの問題の根底には農民の無知、農民自身の本質の問題が横たわっていると思われ、確固たる農業に対する信念が果たしてあるかどうか。自分の経営に没頭するあまり、農業全体、農村全体の問題をおろそかにしてはいなかったらどうか。本を読んだり、教養を高めたり、努力はなされてきたのだろうか。物質的な豊かさを求めたあまり精神的な豊かさを失なってしまうのではないだろうか。

農民自身の手によって、農業が経営として安定したもの、確立された、物心両面の豊かな生活ができたなら、農村が明るい地域社会を築き上げ、日本の精神文化のよりどころとなつたら、農村の疲弊や後継者不足の問題など解決するのではないだろうか。これから、私達農民は、もともとと勉強しなくてはならない。安定した農業経営と心豊かな農村の確立のために、それが、主権者たる農民の義務と責任だと思ふから……。

「国連軍縮特別総会」に参加して

昭和47年度卒 坂本 安靖

去年の六月四日から十五日



会に核兵器完全禁止と軍縮を要請する国民運動推進連絡会議の日本青年団協議会の代表として参加してきました。ニューヨークにおける共同行動は、(一)国際連絡事務所準備されている「国際的行事」(二)国連傍聴及び署名提出、(三)各国代表部要請行動に分けられますが、私は「世界平和と国際行動者会議」「国連見学」「国際行動者会議」「国連ブリーフィング集会」「国連傍聴」「ウルグアイ代表部要請」「国連署名提出」「日本音楽の夕べ」「ニューヨーク百万人デモ行進」等に参加しました。

アメリカ政府のビザ未発給による事務局体制の支障からイヤホン(同時通訳の機器)の係をしながらの参加でした。私達日本代表団(一千三百名)の行動については、当時日本のマスコミでも連日報じられ、同窓会の皆さまもすでにご存知のことと思いますので、ここではニューヨークでの生活など一端を書きたいと思ひます。

ニューヨークは、政治・経済・文化と、あらゆる面で世界をリードしていますので、色々な国から色々な目的を持った人々が集まっています。その人々の中には、大金持ちになる者や、スターになる者、トラブルに巻き込まれて命を落とす者など、まさに様々であります。ニューヨークの街角や広場では、音楽家、サーカス、芸術家、マジシャンなどの即ちちがやたらに大道芸人まがいの芸を見せています。人々は、そこに立ち止まり内容が良ければ小銭を置いて行きます。決して知らん顔を見せません。日本ではちょっと見られない光景です。同窓会の皆さまの中にも

ラオケなどうまい方がおられると思いますが、宇都宮駅前の広場で勝手に歌って美声を披露できますか？

ちょっと頭がイカレているんじゃないかと思われそうです。それがニューヨークでは、何をやっても、おかしくも、はずかしくもないし、また自分の持っている芸を見せたいという、不思議な雰囲気を持っているようです。芸を見せる方も、見る方も真剣で互いに楽しんでいて、さして、長くなってしまいましたが、このような光景を私達も見ましたので、歌を唄って、世界平和、ノーモア・ヒロシマ・ナガサキを訴えようということになりました。

たまたま私達といっしょに歌手の、川津恒一さんが参加されていたので、川津さんをつきあけて、量産のググ・ハマー・シールド広場に向かいました。そして「原爆ゆるすまじ」「ウィーシャル オーバーカム」や「青い空は川津さんのオリジナル」「六月の雨」など多数の歌をうたいました。土曜日ということで、大半の会社は休みですので、大通りは少なかつたのですが、それでも四十〜五十人の人に取り囲まれて、グッスなどもやりながら過ごしました。何人かの友達から質問を受け、そのたびに私達の目的を伝えました。音楽はやはり世界の共通語でした。手拍子なども混えながらの有意義な一日になりました。

最後に、第二回国連軍縮特別総会、何の具体的な軍縮措置も構じられずに閉会となりました。あのニューヨークに結集した百万人の声はどこへいつてしまったのでしょうか。



第33回日本学校農業クラブ全国大会
農業クラブ最優秀賞受賞

今年度は、日本学校農業クラブ全国大会において、プロジェクト経営の部の研究発表が最優秀賞という最高の栄誉を獲得し、輝かしい伝統をつくりました。

これ偏に生徒諸君は勿論のこと、同窓会員の皆さんにもご同慶の至りと存じます。プロジェクト発表の部で最優秀賞に輝いたのは、栃木県でも初めてであり、しかも女子クラブ員がこの賞を得たのは全国でも初めてのことであります。誠に記念すべき栄誉であります。

さて、プロジェクト発表について説明しますと、本校の高垣、小森両先生の指導のもとに、生活科の生徒諸君がメロン栽培の問題点特に果重や糖度について過



随 想

昭和35年度卒 古橋 修一

何か一言、と原稿を頼まれて、さて何を書いて良いやらしばらくペンを取った事のな今日この頃、とまどうばかりでした。

月日のたつのは早いもので、ついこの間卒業したと思つたら、もう二十二年も前のことになりました。

しかし、その頃の思い出はまだ私の胸の中にしっかりと残っています。

私は長男で家の跡を継ぐ、長男だから農業をやるのだと小さいころから言い聞かされた、自分もそう思つて農学校に入るのが夢でした。

発表は、県大会、関東大会と次々に最優秀賞を獲得して、全国大会へと駒を進めたものです。

第33回日本学校農業クラブ全国大会が、昭和五十七年十一月十日〜十二日までの三日間、山口県山口市で開催され、関東ブロック代表の本校が北は北海道、南は沖縄からの各ブロック代表を尻目に見事な発表をやつてのけたのでした。

私は幸いにも、農クの顧問の一人として県大会から全国大会まで終始生徒を引率する立場にあり参加する機会を得られました。

そこで、発表時の雰囲気を感じてみたい。

研究発表の内容は、現代農業のメカニズムを全国のクラブ員にコミニケートするにふさわしい発表でした。

会場は、静の殻を打ち破つて動へと、拍手が嵐のようにこだましました。発表者の姿はピチピチとしてとても美しいものでした。

これは、私のみならず、聴衆者、審査員もひしひしと感じたことと思われ、発表者の歯切れの良い言葉、アクセント、イントネーション、補助者の棒指しの機敏で適切な動作、スライド映写のピント、タイミング等どれをとっても満点に近く三拍子揃った見事なものでした。

この発表の波紋は、全国のクラブ員には消えないことでしょう。

最優秀賞に輝いた時には、発表者と共に感激の涙を流したり、表彰式のファンファーレは今も忘れることなく、胸の底に残っています。

私でさえこれですから、発表者達の感激はなおさらだと思ひます。

本校に錦を飾るにふさわしいおみやげを胸一杯にして、真岡駅に着くと、駅前広場では同窓会、PTAの皆さんの歓迎の集いは、発表者達を含めて初めての体験でもありその感激を新たにしました。

最後に、物心両面に励み、感謝申し上げます。

・ (顧問 星 速雄)

で勉強した事を思い出します。今思うと、あの頃の農業には夢がありました。経営の仕方については誰しも農業をやっている時代でした。……そして二十余年たった今、農業に夢を持ちなさいよ、と声を大にして云う事が出来るでしょうか。

減反政策に端を発し、米価の据置き、そして今、経済貿易摩擦による農産物の自由化の拡大と、何一つ農家に取って有利な条件がないこの頃、あの時の自分のように自分の子供に向かって「長男だからお前、農業をやれ」と云えるだろうか。そんな事をふと考えると、農政のふがいなさ、自分自身のふがいなさを、つくづく感じさせられる今日この頃であります。

昭和57年度
生徒会活動報告

今年度は茂木町の山波荘での研修会を皮切りに生徒会活動が始まった。四月の新入生対象部活動紹介、五月六日生徒会総会等と順調に活動が展開された。五月八日県高校総合体育大会開会式には生徒会役員と陸上部員が参加し、堂々と行進して来たが、その様子が読売新聞に写真入りで掲載された。その後、球技大会、映画会(漂流、美化コンクール、壮行会(陸上部、射撃部)等が行なわれ、全校生徒の和を一層強めた。行事の合間には、生徒会役員と農業クラブ役員との友好を深めるためソフトボールの試合を行なったりした。その他、野球大会の応援、奉仕活動(道路沿いの空きカン拾い、市民会館周辺の除草、紙くず拾い)夏季研修会(於那須湯元)等があった。

行事が開始された。意見交換会を持ち、他校の良い点を多く吸収して来た。

2月5日 クリーン運動
3月下旬 校内役員研修会
以上のような活動を通して役員を中心に多くのクラブ員に輪を広げてまいりました。

家庭クラブは「創造」勤務「愛情」奉仕の四つの精神を柱とした日常生活に密着した活動です。ごくあたりまえの事をクラブ員がみんな実践し、一人一人が人間として成長していくことを願っております。

本年度も幕をおろそうとしていますが、役員は仕事の内容を新役員に引き継ぎ、五十八年度の方針を決定する春の役員研修の準備を進めがばっています。

昭和五十七年度は「創造」勤務「愛情」奉仕の四つの精神を柱とした日常生活に密着した活動です。ごくあたりまえの事をクラブ員がみんな実践し、一人一人が人間として成長していくことを願っております。

昭和五十四年から始められた牛乳の生産調整も組合員の結束、協力により五十七年頃から緩和の兆しが見え始めたことに胸をなで降す思いです。

昭和五十四年から始められた牛乳の生産調整も組合員の結束、協力により五十七年頃から緩和の兆しが見え始めたことに胸をなで降す思いです。



校内役員研修会
3月下旬

私の経営

昭和三十四年度卒
大内知軌

私の経営の柱は酪農であります。昭和三十五年春、ホルスタインの導入が始まりでした。当時はタバコを中心とした米麦農業でした。翌三十六年六月大電害に見舞われ途方に暮れた末、自然災害に比較的被害の少ない飼料作物をもって酪農に主力を向ける事に決心し家族相談の結果、酪農、水稲、養蚕にあり、両親は養蚕を、私は酪農と水稲作と分担制として今日に至っております。

年、国の補助事業により酪農家五戸と共に大型機械を導入し、共同利用により作業の効率化と粗飼料の増産に力を入れた。生産コストを下げ少しでも儲かる酪農経営を目標に取り組んできました。しかし、五十三年度より酪農にも牛乳の生産調整という試練がやって来て、我々酪農家は計画生産という今だかつて味わった事のない苦しい時期が五十七年前半まで続きました。

昭和三十四年度卒
大内知軌

昭和三十四年度卒
大内知軌

昭和三十四年度卒
大内知軌

我が家の経営状況

昭和四十二年度卒
人見幸司

我が家の経営面積は、水田自作地が四百三十アール、畑三十アール、山林三百二十アール、ビニールハウス二

十五アールの農業経営をしております。主な作物は、水稲三百三十アール、イチゴ二十アール(連棟ハウス二十アール)、単棟ハウス五アール、麦八十アール、大豆六十アールです。

昭和三十四年度卒
大内知軌

昭和三十四年度卒
大内知軌

昭和三十四年度卒
大内知軌

私の農業経営

昭和三十六年度卒
水沼弓夫

私の農業経営は、苺、玉葱、サトイモ、肥後牛といろいろやりましたがなかなかうまくいきませんでした。

昭和三十六年度卒
水沼弓夫

昭和三十六年度卒
水沼弓夫

昭和三十六年度卒
水沼弓夫

昭和三十六年度卒
水沼弓夫

昭和五十七年度
家庭クラブ
活動報告

昭和五十七年度
家庭クラブ
活動報告

昭和五十七年度
家庭クラブ
活動報告

昭和五十七年度
家庭クラブ
活動報告

昭和五十七年度
家庭クラブ
活動報告

昭和五十七年度
家庭クラブ
活動報告

昭和五十七年度
家庭クラブ
活動報告

昭和五十七年度
家庭クラブ
活動報告

昭和五十七年度
家庭クラブ
活動報告